

## 抄 正定滅度

### 一．題意

正定聚は現生で信一念のときに往因満足して就く位をいうのに対して、滅度とは阿弥陀仏の浄土に往生して直ちに得る仏果をいい、現生・此土で得るものではない。

正定聚の利益は現生・此土で得るのに対して、滅度の利益は来生・彼土で得るのであって、現生・此土で得るものではない。

### 二．出拠 凡例：註 注釈版聖典、全 真宗聖教全書、新全 浄土真宗聖教全書(2011年3月25日初版)

『大経』第十一願文(Ref 注釈版聖典 P17、全 -P9)

「設我得<sub>レ</sub>仏、国中人天、不<sub>下</sub>住<sub>二</sub>定聚<sub>一</sub>必至<sub>中</sub>滅度<sub>上</sub>者、不<sub>レ</sub>取<sub>二</sub>正覚<sub>一</sub>」

『御文章』一帖目第4通(Ref 注釈版聖典 P1089、全 -P407)

「問うていはく、正定と滅度とは一益とところうべきか、また二益とところうべきや。

答へていはく、一念発起のかたは正定聚なり。これは穢土の益なり。つぎに滅度は浄土にて得べき益にてあるなりとところうべきなり。されば二益なりとおもふべきものなり。

『六要鈔』(Ref 真宗全書 -P321)

「問ふ、定聚・滅度は是れ二益か、また一益か。答ふ、是れ二益なり。定聚といふは、是れ不退に当たる。滅度といふは、是れ涅槃を指す。

「信文類末-現生十益」(Ref「現生十益」注釈版聖典 P251 全 -P72)

「獲<sub>二</sub>得金剛真心<sub>一</sub>者、横超<sub>二</sub>五趣八難道<sub>一</sub>、必獲<sub>二</sub>現生十種益<sub>一</sub>。何者為<sub>レ</sub>十。一者冥衆護持益…中略…十者入<sub>二</sub>正定聚<sub>一</sub>益也」

### 三．<sup>しゃくみょう</sup>釈名：「釈名」とは、名目(教義概念)を解釈する意、教義概念規定をいう。文言の定義である。

・「滅度」とは、涅槃の訳であって、煩惱を滅し迷いの海を度る(仏の悟りを開く、仏果を得る、成仏すること)をいう。

・「正定」(願文では「定聚」、成就文では「正定聚」とは、正定聚の略で来るべき未来に必ず滅度が決定している仲間をいう。

・「正定聚」とは、正しく仏に成ることに決定しているなかまという意味である。必ず仏に成るとは退転しないことをいうから不退転とも称する(Ref 注釈版聖典補注 P1559)。

・「正定聚」とは、邪定聚・不定聚に対する言葉である。本来の意味は、成仏決定をいう。

・「正定聚」とは、第十八願他力念仏の行者をいい、「邪定聚」とは、第十九願自力諸行の行者をいい、「不定聚」とは、第二十願自力念佛の行者をいう。

・「等正覚」 4 眞実信心を得た者は、仏因円満していて、必ず仏と成るから、現生正定聚の位を「弥勒に同じ」と称し、「等正覚」とも名づける(Ref 注釈版聖典巻末註)。

・仏教一般でいう正定聚は、初地(41位)に入ることをいう(Ref 大江淳誠「安心論題講述」p183)。

#### 四．義相<sup>ぎそう</sup>

##### (一)現生正定聚の意義と根拠

1)宗祖は、他力信心開発(信一念)の時、往因満足し入正定聚の利益を得るとされる。

Ref)「信文類末-現生十益」(Ref「現生十益」註釈版聖典 P17、P251 全 -P72)

**【論点】**大経第 11 願で誓われている正定聚と滅度はいずれもお浄土での正定聚であるのに、親鸞聖人は、なぜ、現生・此土での正定聚(現生正定聚)をお示しになるのか

・(A1)大経十八願成就文及び易行品を根拠に明確化されたものである。Ref)六字釈(後述)。

**【解説】**七高僧(除、龍樹)は正定聚を浄土の果相とされるのに対して、易行品では必定が此土の利益と示されるからである(関連する Ref 大江淳誠「安心論題講述」p183)。

・(A2)本質的には、弘願門の証りは、阿弥陀如来から本願力廻向される行信獲得で齎されるものであるからと窺われる。

**【解説】**宗祖が特に此土で正定聚を語られるのは、仏になる因が円満している名号法を全領して滅度の果を開くことが決定することに成るからである(Ref 大江淳誠「安心論題講述」p183)。

『教行証文類』「六字釈」(Ref 註釈版聖典 P170、全 -P22)

『経』(大経)には「即得」( )といへり、釈(易行品)には「必定」( )といへり。「即」の字は願力を聞くによりて報土の真因決定する時刻の極促を光闡(こうせん)するなり。

「必」の言は、金剛心定聚の貌(かおばせ)なり。

( )即得 Ref『大経』下・第十八願成就文「即得往生 住不退転」(全 -P259)

( )必定 Ref『十住毘婆沙論』「易行品 弥陀章」「即時入必定」(七祖 P15、全 -P259)

( )光闡 教えを広く述べること。

『御消息』

しのぶの御房宛「攝取不捨のこと」(註釈版「第 30 通」、Ref 註釈版聖典 P792、全 -P674)

・浄土に往生するまでは不退の位にておはしまし候へば、正定聚の位となづけておはしますことにて候なり。・・・信心定まると申すは攝取にあづかるときに候ふなり。

浄信房宛「如来にひとしき人」註釈版「第 32 通」(Ref 註釈版聖典 P794)

・まことの信心を得たる人は、すでに仏に成らせたまふべき御身となりておはしますゆゑに、「如来とひとしき人」と華嚴經に説かれ候なり。弥勒はいまだ仏に成りたまはねども、このたびかならずかならず仏に成りたまふべきによりて、弥勒をばすでに弥勒仏と申し候なり。その定(じょう)に( =それと同様に) 眞実信心を得たる人をば、如来とひとしと仰せられて候なり。

隋信房宛「金剛心になるとき」(註釈版「第 39 通」、Ref 註釈版聖典 P802、全 -P684)

・弥陀他力の回向の誓願にあひたてまつりて、眞実の信心をたまはりてよるこぶこころの

定まるとき、攝取してすてられまゐらせざるゆゑに、金剛心になるときを正定聚の位に住すとも申す。弥勒菩薩と同じ位になるとも説かれて候めり。弥勒とひとつ位になるゆゑに、信心まことなるひとを、仏にひとしとも申す。

2)正定聚の利益は、聖教上も現生の事態とある。

『仏説無量寿經』「弥勒付属の文」(Ref 註釈版聖典 P81、全 - P46)

「若有~~二~~衆生~~一~~、聞~~二~~此經~~一~~者、於~~二~~無上道~~一~~終不~~二~~退轉~~一~~」

もし衆生ありてこの經を聞く者は、無上道においてつひに退轉せず。

『仏説阿弥陀經』(Ref 註釈版聖典 P127、全 P71)

もし、善男子・善女人ありて、この諸仏の所説の名(みな=阿弥陀仏の名号)および經の名を聞かんもの、この諸の善男子・善女人、みな一切諸仏のためにともに護念せられて、みな阿耨多羅三藐三菩提を退轉せざることを得ん。

『易行品(十住毘婆沙論 十方十仏章)』

・阿弥陀等の仏およびもろもろの大菩薩、名を称し一心に念ずれば、また不退轉を得(Ref 七祖註釈版 P14、全 -P258)。

・人よくこの仏の無量力威徳を念ずれば、即時に必定に入る(Ref 七祖註釈版 P16、全 -P258)。

【考察】易行品には、すなはち必定に入りて阿耨多羅三藐三菩提を得と必定と無上涅槃を直結する御文がある(Ref 七祖註釈版 P15、全 P-259)。

【考察】これをどのように考えればよいであろうか。

宗祖の上で、無上涅槃や無上の功德{「阿耨多羅三藐三菩提」=無上正眞道(この上ない仏の証り)}を得るのは当益(未来)であるのを踏まえて下記の表現があるのと同様と解される。

即ち、「いたる」や「かならず」が当益を案内すると同様に、易行品では「入りて」の文言の後に「その後」の趣旨が込められていると考えれば足りる。

例1)「念佛の人は無上涅槃にいたること、弥勒におなじきひとと申すなり」(『一念多念証文』註釈版 P682)

例2)如来の本願を信じて一念するに、かならずもとめざるに無上の功德を得しめ(Ref 註釈版聖典 P658)。

## (二)正定聚と滅度の関係について

1)正定聚の位には現生で信心獲得即時に就くのに対して、滅度は当来に浄土往生して得るのであって、両者は峻別される。

「証文類-眞実証の文」(Ref 註釈版聖典 P307、全 -P103)

「獲~~二~~往相回向心行~~一~~、即時入~~二~~大乘正定聚之数~~一~~。住~~二~~正定聚~~一~~故、必至~~二~~滅度~~一~~」

正定聚には、「即のとき」「入る」と称するのに対し、滅度には「至る」と称する。

「信文類末-眞仏弟子釈」(Ref 註釈版聖典 P262、全 -P78)

またいはく(散善義)(<若念佛者>より下<生諸仏家>に至るまでこのかたは、まさし

く念佛三昧の功能超絶して、まことに雑善をして比類とすることを得るにあらざることと顯す。すなはちそれに五つあり。

一つには、弥陀仏の名を専念することを明かす。・・・(中略)・・・

五つには、今生にすでにこの益を蒙れり、命を捨ててすなはち諸仏の家に入らん、すなはち浄土これなり。かしこに到りて長時に法を聞き、歴事供養せん。因円かに果満ず、道場の座あに除(はるか)ならんやといふことを明かす)と。

『一念多念証文』「法事讃・下註」(Ref 註釈版聖典 P692-3、全 -618)

東宮の位にあるひとはかならず王の位につくがごとく、正定聚の位につくは東宮の位のごとし、王にのぼるは即位といふ、これはすなはち無上大涅槃にいたるを申すなり。信心のひとは正定聚にいたりて、かならず滅度に至ると誓ひたまへるなり。・・・(中略)・・・かならず安樂浄土へいたれば、弥陀如来とおなじく、かの正覺の華に化生して大般涅槃のさとりをひらかしむるをむねとせしむべしとなり。」

## 2)滅度は、往生と同時の事態である。

「信文類-便同弥勒釈」(Ref「信文類」三(末)便同弥勒釈、註 P264、全 -79)

「念仏衆生、窮~~=~~横超金剛心~~-~~故、臨終一念之夕、超~~=~~証大般涅槃~~-~~」

・横超の金剛心を窮むるがゆゑに・

「信文類末-横超釈」(Ref「信文類末 横超釈」註釈版 P254、全 -p73)。

「一念須臾頃、速疾超~~=~~証無上正眞道~~-~~故曰~~=~~横超~~-~~也」

「大願清浄の報土には品位階次をいはず。一念須臾のあひだに、すみやかに疾く無上正眞道(=阿耨多羅三藐三菩提=この上ない仏の証)を超証す。ゆゑに横超といふなり

『易行品(十住毘婆沙論 百七仏章)』

・国土はなはだ清浄なり。名を聞けばさだめて仏に作(な)る(Ref 七祖註釈版 P13、全 -P258)。

易行品では、原則として、名をきけば不退転を得と繰り返し記される一方で、「国土はなはだ清浄なり」と国土について述べる段階で、初めて仏になると示されているからである。

### (三)浄土における正定聚(彼土正定聚)の意義

【論点】第11願で誓われている正定聚は、お浄土での正定聚である。親鸞聖人も一多証文には、『往生論註』の御文の解釈で、「すでに往生を得たるひとも、すなはち正定聚に入るなり」(Ref 註釈版聖典 P681)と仰せである。これはどう理解すべきか？

(A)彼土正定聚は、滅後の菩薩たる広門示現相の菩薩である。

【解説】広門相の正定聚は、滅度の悟りを開いた者が因位の相を示現するものであって当益である。この場合は、正定即滅度ということが出来る(Ref 大江淳誠「安心論題講述」p186)。

一方、因より果に至る正定聚は必ず現生の益とする。この場合(現生正定聚)は、即滅度とは言

わない(Ref 大江淳誠「安心論題講述」p183)。

## 1)宗祖の読み替えられた証拠の御文

「証書類-大証釈-論註・下」(Ref 註釈版聖典 P309、全 -P104)

「<莊嚴妙聲功德成就とは、『偈』に、<<梵声悟深遠 微妙聞十方>>といへるがゆゑに>(浄土論)と。・・・(中略)・・・<もし人ただかの国土の清浄安楽なるを聞きて、剋念として生ぜんと願ぜんものと、また往生を得るものとは、すなはち正定聚に入る>と。

『一念多念証文』『往生論註』『妙聲功德釈』(Ref 註釈版聖典 P681、全 -P607)

この文のころは、「もし人ひとへにかの国の清浄安楽なるを聞きて、剋念して生れんと願ふひとと、またすでに往生を得たるひとと、すなはち正定聚に入るなり。

Ref)元になった『論註』『妙聲功德釈』の御文(Ref 七祖註釈版聖典 P119-5、全 -324)

**全書の読みは、宗祖の読みで記載されている。**

「莊嚴妙聲功德成就とは、偈に、<梵声悟深遠 微妙聞十方>といへるがゆゑなり。

これいかんが不思議なる。経にのたまはく、「もし人ただかの国土の清浄安楽なるを聞きて、剋念して生ぜんと願ずれば、また往生得て、すなはち正定聚に入る」と。

**【解説】**(Ref 註釈版聖典「一念多念証文」P681 脚注)

ア)『論註』の当分では「剋念して生ぜんと願ずれば、また往生を得てすなはち正定聚に入る」と読み、剋念願生する者が浄土に往生して正定聚に入る義である。

イ)これに対して親鸞聖人は原文を読み変えて、a)剋念願生する者(此土)と b)浄土に往生した者(彼土)の二種類の正定聚があることを示されたものである。

結論:浄土の正定聚は、滅後の菩薩の姿を示す広門示現相(従果降因とも称す)である。

## 2)広門示現相について

『仏説無量寿経』巻上「弥陀果徳 眷属莊嚴」(Ref 註釈版聖典 P37、全 -21)

(お浄土の)もろもろの声聞・菩薩・天・人は、智慧高明にして神通洞達せり。ことごとく同じく一類にして、形に異状なし。ただ余方に因順するがゆゑに、天人の名あり。顔貌(げんみょう)端正(たんじょう)にして超世希有なり。容色微妙にして、天にあらず、人にあらず、みな自然虚無の身、無極の体を受けたり。

「自然虚無の身、無極の体」とは、涅槃の異名、(仏の悟りそのもの)(略)をいう。浄土における身体は涅槃のさとりに叶い、絶対の自由をもつものであるとの意(註 P37 脚注)。一方、さとりそのものが広く展開した姿を「広」という。

『仏説阿弥陀経』(Ref 註釈版聖典 P123、全 -68)

この(お浄土の)諸の衆鳥は、皆是阿弥陀仏の法音を宣流せしめんと欲したまふ変化の所作なり。

## 五．結び

浄土真宗の利益は、現生・此土の正定聚、来生・彼土の滅度であって、両者は峻別され、現生・此土で滅度を得るわけではない。

来生・彼土の正定聚は滅後の菩薩の姿を示す広門示現相である。 以上